

芥川龍之介

藪
の
中

藪
の
中

検非違使けびいしに問われたる木樵きこりの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いけございませぬ。わたしは今朝けさ何時いもの通り、裏山の杉を伐きりに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処でございますか？ それは山科やましなの駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に瘦せ杉の交つた、人気のない所で

ございます。

死骸あおもむは縹はなだの水干すいかんに、都風みやこふうのさび烏帽子えぼしをかぶった儘まま、仰向あおもむけに倒れて居りました。何しろ一刀ひとかたなとは申すものの、胸もとの突き傷すほうでございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居ったようでございます。おまけに其処うまばえには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べったり食いついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかったか？　いえ、何もございま

せん。唯その側の杉の根がたに、縄が一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄の外にも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあったものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、余程手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬なぞには、はいれな
い所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔た
って居りますから。

検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇^あつて居ります。昨日の、——さあ、午頃^{ひる}でございましょう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟^む子^しを垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣^{きぬ}の色ばかりでございます。馬は月毛^{つきげ}の、——確か法師髪^{はし}の馬のようでございました。丈でございますか？ 丈は四寸^{よき}もございま

したか？——何しろ沙門しゃもんの事でございますから、その
 辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯び
 て居れば、弓矢も携そえて居りました。殊に黒い塗えんりびら
 へ、二十あまり征矢そやをさしたのは、唯今でもはつきり覚
 えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りま
 したが、真まことに人間の命なぞは、如露にょろ亦やく如電にょでんに違ちがいござ
 いません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な
 事を致しました。

検非違使に問われたる放免ほうめんの物語

わたしが搦からめ取った男でございますか？　これは確か
に多たじようまる襄丸と云う、名高い盗人でございます。もつともわ
たしが搦あわため取った時には、馬あわたから落ちたのでございまし
よう、栗田口あわたの石橋の上に、うんうん呻うなって居りました。
時刻でございますか？　時刻は昨夜の初更しよこう頃でございま
す。何時ぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺
の水干ほかに、打出しの太刀を佩はいて居りました。唯今はそ
の外ほかにも御覧の通り、弓矢の類たずささえ携たずさえて居ります。

さようでございますか？ あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いないございません。革を巻いた弓、黒塗りの箆えびら、鷹の羽の征矢そやが十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬も仰有る通りおっしや、法師髪はつりの月毛つきごでございませす。その畜生に落されるとは、何かの因縁いんげんに違ちがいございません。それは石橋の少し先に、長い端綱はづなを引いた儘、路ばたの青芒あおすすきを食って居りました。

この多襄丸と云うやつは、洛中に徘徊する盗人の中で、女好きのやつでございませす。昨年とりのべの秋鳥部寺であらの賓頭びんず盧る

の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童めわらわと一しよに殺されていたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあの男を殺したとなれば、何処へどうしたかわかりません。差出がましゅうございますが、それも御詮議下さいまし。

検非違使に問われたるおうな媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございませぬ。が、都のものではございませぬ。若狭の国府の侍で

ございます。名は金沢の武弘たけひろ、年は二十六歳でございました。いえ、優しい気立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさご、年は十九歳でございませす。これは男にも劣らぬ位、勝気の女でございませす。まだ一度も武弘の外には、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻ほくろに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりざねがおでございます。

武弘は昨日きのう娘と一しよに、若狭へ立ったのでございませす、こんな事になりますとは、何と云う因果でござい

ましょう。しかし娘はどうなりましたやら、婿むこの事はあ
 きらめましても、これだけは心配でなりません。どうか
 この姥うばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを
 分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ
 憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでござ
 います。婿むこばかりか、娘までも……（跡は泣き入りて
 言葉なし）

*

*

*

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何処へ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にか
けられても、知らない事は申されません。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子むしの垂絹たれぎぬが上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、――

見えたと思う瞬間には、もう見えなくなったのですが、一つにはその為もあったのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩によぼ さつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とっさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、唯権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけ

でも殺すでしょう。成程血は流れない、男は立派に生きて
いる、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを
考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、ど
ちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に
不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来る
だけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、
あの山科の駅路では、とてもそんな事は出来ません。そ
こでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしま
した。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚をあば発あいて見たら、鏡や太刀が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪の中へ、そう云う物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。慾と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けていたのです。

わたしは藪の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は慾に渴いていますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると言うのです。又あの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺にはまったのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へはいりました。

藪は少時しばらくの間は竹ばかりです。が、半町程行った処しとに、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕し遂とげるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは

藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、尤^{もつと}もらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎^{まば}らになると、何本も杉が並んでい
る、——わたしは其処へ来るが早いかな、いきなり相手を
組み伏せました。男も太刀を佩^はいているだけに、力は相
当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。
忽^{たちま}ち一本の杉の根がたへ、括^{くく}りつけられてしまいました
た。縄ですか？ 縄は盗人の有難さに、何時塀を越える
かわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。

勿論声を出させない為にも、竹の落葉を頬張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまおうと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星に当たったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠いちめがさを脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところが其処へ来て見ると、男は杉の根に縛られている、——女はそれを一目見るなり、何時の間に懐から出していたか、きりりと小刀さすがを引き抜きました。わたしはまだ今までに、

あの位気性の烈しい女は、一人も見つた事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。いや、それは身をかわ躲した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすがを打ち落しました。いくら気の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、———そうです。わたしはその上

にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋すがりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——あえそうも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方よ

り残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊ことにその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴かみなりに打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭にあったのは、唯こう云う一事だけです。これはあなた方思うように、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかったの

です。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那^{せつな}、わたしは男を殺さない限り、此処は去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相を変えた儘、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利^きかずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は

二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っていますのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何処にもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残っていま

せん。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、断末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ為に、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其処にはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。唯、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。

どうせ一度は櫓おうちの梢こざえに、懸ける首と思っ
ていますから、どうか極刑に遇あわせて下さい。
(昂然たる態度)

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめに
してしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑
ました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら
身悶みもだえをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひし
と食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶよ

うに走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかし其処に閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑さげすんだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、

その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何処かへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよ

る立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなった上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこの儘あなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌^{いま}わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂けそうな胸を抑えながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪われたのでしよう、

太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀さすがだけは、わたしの足もとに落ちていっているのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺

せ。」と一言云ったのです。わたしは殆、夢うつつの内に、夫の縹はなだの水干の胸へ、ずぶりと小刀さすがを刺し通しました。

わたしは又この時も、気を失ってしまったのでしよう。やっとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交った杉むらの空から、西日が一すじ落ちていますのです。わたしは泣き声を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もあり

ません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀さすがを喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢ふがにはなりません。

（寂しき微笑）わたしのようふがに腑甲斐いないものは、大慈大悲の観世音菩薩も、お見放しなすったものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇ったわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——（突然烈しきすすりなき歎歎）

巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云っても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えた
いと思った。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐ったなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたま

しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているよ、自分の妻になる気はないか？　自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうっとり顔もたを擡もちげた。おれはまだあの時程、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？　おれは中ちゆう有ゆうに迷っていても、妻の返事

を思い出す毎に、しんい 嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云った、——「では何処へでもつれて行って下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、いま程おれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、忽ち顔色を失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい

さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様におれを吹き落そうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこの位呪わのろしい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこの位、——（突然迸ほとばしる如き嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。盗人はじつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒けたお

された、（再^{ふたたび} 迸る如き嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯^{うなず}頷けば好い。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。（再、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫ぶが早いか、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかったが、これは袖さえ捉えなかつたらしい。おれは唯幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、

一箇所だけおれの縄を切った。「今度はおれの身の上だ。」
——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、こ
う呟つぶやいたのを覚えている。その跡は何処も静かだった。
いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、
じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れ
ば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三み
度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。お
れの前には妻が落した、小刀さすが一つ光っている。おれは
それを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥なまぐさ

い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽さえず嘯りに来ない。唯杉や竹の杪うらに、寂しい日影が漂っている。日影が、——それも次第に薄れて来る。もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れた儘、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、何時か薄闇が立ちこめている。誰か、——その誰かは見え

ない手に、そつと胸の小刀さすがを抜いた。同時におれの口の
中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永
久に、中ちゆう有うの闇へ沈んでしまった。……

(大正十年)

日本文学電子図書館

藪の中

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館